

誰もが自分らしく生きる事が できる地域を目指して 〜精神障害のある人から学んだこと〜

半世紀以上前から、精神障害のある人(以下、当事者)の地域生活を支えるための活動を続けている「公益社団法人やどかりの里」。そこで45年間従事している増田一世さんは、常に「当事者から学ぶ」姿勢を大切にしてきました。

増田さんに、当事者が地域で暮らしていくために実践していることについて伺いました。

精神障害者支援の仕事に就ききっかけを教えてください。

大学4年生の時、やどかりの里の理事長を務めていたゼミの教授から「当事者から学ぶことで大学院2年分の勉強ができる」ところだと勧められ、1978年に門を叩いたことが出発点です。

やどかりの里は1970年に設立しましたが、当初は住まいの確保や職場の開拓に取り組みしていました。当事者を地域で支える法律も制度もない時代でしたので、公的な補助金が得られず、財政的には厳しい状況が続きました。2年目に研修生から非常勤職員となり、一人前のソーシャルワーカーを目指して現場で勉強させていただきました。

1987年に精神保健法が制定されて、人権擁護や社会復帰が促進されます。その後、やどかりの里は1990年に社会復帰施設を開設することになり、私も正職員になりました。さらに地域

生活支援センターや作業所、グループホームなど、地域のなかに次々と事業を展開していきました。**仕事をするなかで苦労されたこと、気付いたことは何ですか。**

私は当初、回復プロセスを援助するためのグループ活動にスタッフとして関わっていました。その際、「当事者の皆さんはあなたと一緒にいるのが窮屈みたい。一方的に押し付けられると言っていますよ」という話を先輩職員から伝えられました。

私は、崖から突き落とされたような挫折感を味わい、何をどう伝えたらよいのか分からなくなりました。

そこで、私の言動についてどう感じたか、その都度当事者の皆さんに確認するようにしました。結局、私は自分の価値観を押し付けていたのです。先輩から学んだ「当事者から学びなさい」ということの大切さをあらためて実感しました。

ためには、法律や制度のなかだけで仕事をしてはいけなさと考えてきました。

また、地域のなかには「助けて」と声を上げることができずに自宅に閉じこもったり、病院を転々としていたりする人がいますが、私たちはなかなかその人たちがつながることができません。そこで地域に向いて居場所づくりをしようと考えたのです。

しかし、精神保健福祉を切り口に地域とのつながりを構築していくことは簡単ではありません。精神障害は地域住民にとって、まだ身近なものと感じられないからです。そこで誰もが自分らしく生きていることができる地域づくりを目指し、「つながるプロジェクト」を立ち上げました。

どのようなプロジェクトですか。

やどかりの里がある、さいたま市見沼区が農業地域であることに注目し、農業等を使わない自然栽培の農園を始めたところ、さまざまな団体や地域の方々とのつながりができました。そして、農園で飼っている2匹のヤギを連れて地域を巡回し、出張カフェや「まちなか保健室」を開催しています。保健師、看護師、精神保健福祉士、薬剤師などが健康に関する無料相談に応じるもので、多くの人が利用して下さっています。

地域に向けて参加しやすいシチュエーションをつくることできれば、地域の皆さんは集まってくれます。そこに当事者もスタッフとして自然なかたちで関わっています。

そして、その人らしい働き方ができるソーシャルファーム事業をどうしたら実現できるのか考えているところです。



2021.12発行 やどかり出版

また、グループ活動の記録をずっとつけていたが、先輩職員が書いてくれるコメントが私の支えになっていました。「記録のない実践は実践にあらず」という言葉も先輩から教えられたものです。

これまでの仕事を通して、現在の増田さんの礎になったことはありますか。

私はこれまで出版事業にも関わり、精神保健福祉に関する雑誌や、書籍の編集を担いました。なかでも当事者の半生を詳しく聞き取って本にまとめる仕事は、私にとって貴重なものとなりました。当事者の多くは、人生のどん底を経験した方たちです。精神病院に入院したことがある人は、病院の鉄の扉が閉まる音を聞いたときに、「人生が終わったと感じた」と、皆さん一様に語ります。

しかし、退院して仲間と出会ったり、自分の居場所を見つけるなかで回復していく。本人の努力はもちろんですが、その人を取り巻く環境を整えることで、生き直すことができるのだと実感させられました。そのことが、私にとって大きな財産であり、だからこそ私はこの仕事を続けてこれただと思えます。



「つながるプロジェクト」の活動

最後に、メッセージをお願いします。

精神疾患はゆつくりではありませんが、回復していくものです。自分だけで頑張らず、誰かを頼って良いのです。そのために、社会が支える環境をどう整えていくかが重要です。

これからも、民生委員・児童委員など地域福祉に関わる皆さんに、地域の実情を教えてください。共にさまざまな地域福祉活動を進めていきたいと思っています。

共に話し合いや活動をしていくことで、精神障害について知っていたら機会となり、地域に暮らす当事者の皆さんも生きやすい環境づくりにつながればと思います。

やどかりの里では地域に目を向けた活動に取り組んでいらっしゃいますね。

やどかりの里がやどかりの里らしく存在する

公益社団法人やどかりの里理事長 やどかり出版代表 増田 一世さん

プロフィール

明治学院大学卒業。精神障害者の地域生活を支える公益社団法人である、やどかりの里で援助活動に従事する傍ら、出版事業も行う。2020年やどかりの里理事長に就任、精神障害者と共に働きながら、地域づくり、人づくりに注目した事業展開を行っている。

日本障害者協議会常務理事。埼玉県セルフセンター協議会会長、埼玉のちの電話評議員など、外部団体の役員も務めた。内閣府等の会議にも参画し、精神保健福祉改革に向けた提言づくり、その実現に向けた活動に関わっている。

